



平成30年10月26日

佛教大学附属幼稚園

## ドヤ顔はしっかりほめる

園長 田中典彦

たった今、園の玄関で「おはようございます」と挨拶をしたと思っていたのに、もう竹馬に乗ったり、園庭を駆け回っている子どもたちの姿に元気をもらっている日々です。運動会を前にしてますます張り切っているようでした。やがて運動会の練習が始まり、となりの大きな運動場のあちこちで歓声がひびきわたってきました。気になるのでそっと見に行ってみたのです。私の姿を見つけたこどもたちが竹馬でやってきて、「園長先生、僕のものよ」「わたしもできるよ」とほこらしげに見せつけにやってくるのです。「あ！ころんだ」。一瞬痛そうな顔をしなげすねをちょっとさすってはまた乗る。ころんでもころんでも起き上がっては竹馬にチャレンジしているのです。「できたー」。よちよち歩いてはまた転ぶ。だけど今度は笑顔です。少し上手な子がやってきました。「見て！見て！見て！こんなことができるよ」。竹馬ケンケンです。円を描いたり、台から飛び降りたり。

子どもたちのころは、「したい」→「やってみる」→「できる」→「もっとやる」→「もっとこうしたい、やってみよう」。どんどん自信をつけては工夫し、冒険するのです。このような行動を通して痛いこと、危険なことそしてそれからの回避などを身を以て認識するのです。さらに自分の得意不得意を知り、あまりうまくできない友達への援助など共にやることの楽しさをも修得してゆきます。こどもたちの体と心は「する」ことによって育まれてゆくものなのでしょう。

仏教では人格の形成は行為によってなされると教えられています。それを業論（ごうろん）といいます。業とは、行為とその余勢ということです。わたしたちの行為は瞬間に終わってゆくものなのですが、かならずそのあとに働きを残して、次の瞬間からの行為者の在り方に関わってくるとするのです。ここにいう行為は、体で行う行為・口（言葉）でなされる行為・思考としてなされる行為の三つです。私の心の中の思いがこれらの行為として表されると、次の私の在り方に影響を与え果をもたせるわけです。ですから大人の人々には、三業を清浄に保つことによって心を清めることが勧められているのです。

幼児期はまだまだ無邪気です。このためにこれをやってみようといった思惑はありません。まったく邪な気持ちをもってはいないのです。とにかく「したい」ことを一心にやるのです。身体的行為によって経験を取り込むのです。これが身体的認識と言われています。なんでも口に運んで確認する時期があるのもそのためです。

自分を表すのにすべて体をもってします。いやいやと座り込む、気に入らない時はダダをこねる。体が言葉でもあるのです。「こどもは一冊の本である。われわれはまず、そこから何かを読み取り、そして書き加えねば

ならない」これが教育なのだといわれます。仏教では、「対機説法」と言われ、相手の人柄に応じて教を説くことにあたります。こどもの場合には、そのこどものしたいこと、望んでいることを理解して、共にそれをしながら何かを加えていく。それが保育の立場にある人に求められることなのでしょう。

幼稚園ではそれぞれの子どもさんの「したい」→「やってみる」→「できる」がとても大切だと考えています。ドヤ顔はしっかりほめましょう。

